

The Tokyo Tanuki Times

東京タヌキタイムズ

2015年12月号 通巻84号 毎月1日発行 購読無料

©MIYAMOTO Takumi,2015

責任編集：宮本拓海 発行：東京タヌキ探検隊！ tokyotanuki.jp

祝！大村智氏ノーベル賞受賞

大村先生はタヌキの救世主なのです



タヌキの疥癬症の例を紹介する。

(左)疥癬症がかなり進んだ状態で、地肌が見えている。

(右)顔のまわりはまだ毛が残っているが、目は十分に開いていない状態である。耳の縁も形がくずれてしまっている。

(いずれも2010年11月、文京区で撮影)

2015年10月5日、夜のテレビニュースで大村智氏がノーベル生理学医学賞を受賞したとの報道がありました。えっ、あの大村先生ですよ？ ついに受賞なんですね！

有名ではなかった大発見

疥癬症は人間や一部のほ乳類で発症する皮膚の病気です。ヒゼンダニ類が皮膚に寄生することで発症します。強いかゆみが生じ、人間の場合、皮膚に赤い点々が出るなどの症状が出ます。動物の場合ではイヌやネコでの発症がよく知られていますが、野生動物の中ではタヌキでの報告が多くあります。東京タヌキ探検隊！が収集した目撃情報でも約1割で脱毛症状が見られ、原因は疥癬症と考えられています。

大村先生の功績は既に広く報道されている通り、抗寄生虫薬イベルメクチンの元になったエバメクチン Avermectin の発見です。イベルメクチンは最初は家畜向けの薬として使用されましたが、人間の病気である

オンコセルカ症などにも効果があることがわかり、世界的に広く使われることになりました。また、イベルメクチンはイヌではフィラリア、疥癬症の薬として使用され、タヌキの疥癬症の薬としても使われています。イベルメクチンの功績は医学・獣医学の寄生虫病の分野では世界的に知られていたものでした。それでもなかなかノーベル賞受賞に至らず、「これだけの成果でも受賞できないのかー」と私も思っていました。そして今年ようやく受賞となったのです。ノーベル賞は死んだ方には授与されません。長生きするのも受賞のコツなんだなあ、とあらためて思ったりもしました(大村先生は今年80歳なのです)。

野生動物は助けるべきか？

タヌキを救うイベルメクチン、ですがすべてのタヌキを救えるわけはありません。日本中に散らばっている疥癬症のタヌキすべてを捕獲すること自体が不可能なことなのです

から。それに、野生動物に人間が介入していいのか、という問題があります。病気にかかり、死ぬことがあるのも野生動物の運命です。絶滅危惧種なら保護も必要かもしれませんが、タヌキは絶滅の心配もありません。公平性の点から考えると、タヌキだけを特別扱いするわけにはいきません。スズメもヘビもカエルもヨシノボリもカブトムシもアリもクマムシもミジンコも…すべて公平に扱わねばなりません。そんなことは不可能です。

とは言え、タヌキの疥癬症にはわからないことが多くあります。病気と治療の研究は必要なことです。そうすればいつかより良い解決方法が見つかるかもしれません。

スポンサー枠

スポンサー募集中です！

全国のタヌキ、ハクビシンなどの情報を集めています。

<http://tokyotanuki.jp>